

2015/3/1

しろひげ@Kurobane です。

3月になりました。

冬の中から約束を果たすようにやってくる春ですが、いつ季節を渡ったかを判断しにくいことも春の魅力の一つでしょう。

三寒四温を行きつ戻りつしながら、母親が子どもの手を手を引くように穏やかななか、少しずつ温かみを増していくのがこの時季です。

しかし、あの日あの時から、3月の声を聞くと、鋏で断ち切られたかのような感覚に襲われるようになりました。

震災の前と後を分かたず、巨大で鋭い刃を持った鋏のような存在が、私たちを突き動かします。

「ここ被災地では、私達は3月を愛さないし、3月もまた私たちを愛さない。3月は凄惨な記憶を甦らせ、私たちの心をずたずたに引き裂く。・・・2月のあとがすぐ4月であったらと思

う。」

照井翠という、岩手県の高校教師で東日本大震災を経験した人のエッセー・『釜石の風』の一節です。

目の前で起きた悪夢のような出来事のために、愛すべき日常がズタズタにされた人たちがいることを、3月をないものにしたいと願う人がいることを、私たちは忘れてはなりません。

春を明るいものと見た「かつて」に立ち戻れない人々に思いをはせながら、3月をあらためて鎮魂と再生の月とし、想像力を問い直す日々をしたいものです。

とはいえ、自然の摂理はあくまでおおらかで、寒々と硬かった大地が潤ってゆるむ様は、人間の卑小さを超越した悠々たる貫禄です。

「厳父の厳しさ」ばかりではなく、「慈母の愛」も与えてきた日本の自然は、春の百花が被災された方々への無言の励ましになることを祈りたいものです。

いのち萌える春よ、どうか慈母の優しさで、私たちを包まれんことを、そんなことを呟きながら3月が始まりました。

黒羽根整形外科

黒羽根洋司